

中国人の寛い心

堺澤 一生

ハイラル伊敏河断橋のほとりにある「望郷」と名付けられた像に胸を打たれました。難民と化した日本婦人がトランクを片手に、幼子の手を引いて日本を目指す姿です。婦人はきれいに髪をなでつけ、衣服もきちんとしており、やつれた様子はなく端正な印象で、制作者の暖かい心が感じられます。

矛盾するようですが、しかし全体の感じが日本人のそれとどことなく違う—— 非難の意味で言っているではありませんが——像は日本人がつくったものではないとわかります。感じがどことなく違う。そのことは制作者もあるいは気付いていたかも知れない。それでも、一面加害者でもある日本人の流浪の像を同情をもってつくった。そこに制作者の、中国人の心の寛さを感じました。

像が示す頃、黒竜江省で乳呑児を抱えた避難民の日本婦人から、重病の幼女をひきとって育てた貧しい農民が、その養女が学業成績抜群で師範学校に合格した時、宝物のようにしていた中華鍋を売って洋服を整え、彼女は涙して感謝したという話に感動したことがあります。像を前にそのことも思い合わせました。

日本人公墓が国交回復前にもかかわらず建立されたのは、こうした中国人多数の支えがあってこそ可能だったといえるでしょう。



<板垣裕一撮影>

それにつけても、難民、流浪の民と化した開拓団の苦難を旅で実感しました。戦時中に口にした歌を想い起こしました。「見渡す限り果てもなき、ここ満州の^{ひろのほら}広野原——」バスで移動することが多かったのですが、かなりの時間走っても景色は変わりありません。どこまでも広野原が広がり、地平線はいつまでも彼方です。歩いて逃避行を続ける難民は何を思ったのでしょうか。方正の松花江のほとりに「対岸の左方、はるか彼方がハルビンです」との説明とあわせて絶望の底知れぬ深さを思いました。

甘南県の開拓団入植地跡が整然と区画されて今に残る様子に、いわゆる“王道楽土”を夢見た開拓団の理想を垣間見る想いがただけに、落差の懸隔をなお強く感じました。

ところで、もう随分前に聞いた話があります。日中国交回復前、旧開拓民のあるグルー

プが、関係者自決の地への墓参が許されて、その地を訪れた時のことです。訪れた人たちは線香、花、供物を供えしばし涙にくれました。しばらくしてまわりの雰囲気がおかしいことに気付き、われに返ってあたりを見まわすと、中国人にやや遠巻きにかこまれていたそうです。決して好意的な雰囲気ではなく、異様なとも形容すべき雰囲気だったと。

第二次大戦後でのアジアの犠牲者は一千万人といわれます。取り囲んだ中国人たちは家族を失わないまでも親類、知人を失った人が多かったのではないかと、帰国後に語る人がいたそうです。

日本人が加害者でもあった一面は忘れてはならないことだと思います。“前事忘れず、後事の師となす”その上に日中友好を築きたい。

<さかいざわ・かずお：1933年生まれ。名古屋市在住。94年退職後、戦後50年を節目に、南太平洋の戦跡（ガダルカナル、ラバウル他）を巡る旅や日本の旧植民地などを訪ねている>